

幼児教育者の養成を目的とした 組織キャンプの効果に関する一考察

西島 大祐 (初等教育学科・講師)

A study on the Effect of the Organized Camp as a Training Program for Future Preschool Teachers

Nishijima, Daisuke

Abstract

This paper examines the impact of an organized camp experience on junior college postgraduates pursuing careers in early childhood education. An analysis of questionnaires and reports submitted by participants indicates there is potential for the development of their understanding of the value of an outdoor program. Furthermore, the paper reports that an educational camp has a deep impact on both the participants' awareness and understanding of the importance of instilling an appreciation of nature in young children through experience.

Keywords : Child Development, Outdoor Education, Organized Camp, Nature Experience, Adventure Education

キーワード：幼児教育、野外教育、キャンプ、自然体験、冒険教育

はじめに

幼児教育や保育の場で子どもの活動を考える上で、自然体験はその生活と切り離せないものであるということが出来る。自然体験の必要性は幼稚園教育要領をはじめ、保育所保育指針や学習指導要領にも明記されており、また自然体験活動の教育的効果についても「飯田、井村、岡村などにより多彩な研究が行われ」（岡島ら、2006年）るなど、その必要性を述べる論文が多く存在する。

青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議（1996）では自然体験活動が「自然の中で、自然を活用して行われる各種活動であり、具体的には、キャンプ、ハイキング、スキー、カヌーといった野外活動、動植物や星の観察といった自然・環境学習活動、自然物を使った工作や自然の中での音楽会といった文化・芸術活動などを含んだ総合的な活動である」と捉えるなど、組織キャンプを通して得られ

る自然体験は非常に多いと考えられる。

キャンプはその種類や目的、対象者や期間などによって活動が様々であるといえる。近頃は青少年団体や民間団体の実施するキャンプだけでなく、幼稚園や自然学校などが実施する幼児のキャンプも増えてきている。

キャンプに代表される野外での教育活動は一般的に野外教育と呼ばれる。近年では野外教育が環境教育と冒険教育の融合されたものであるという見解が強くなり、野外教育が環境教育と冒険教育の総合的な学習の場である（岡村、2000）というような見方をされるようになった。近年、教育的に組織されたキャンプが行われる場合には、環境教育や冒険教育を意識した活動プログラムが展開されることが多い。

環境教育は自然環境の保全に対する行動や自然に対する理解などを目的とした教育方法であるが、最近では特に世界的な問題として環境問題がメ

ディアなどで取り上げられるようになった。日本でも環境教育に関する実践は様々な形で行われている。ネイチャー・ゲームやプロジェクト・ワールドなどの活動もその中に含まれるといえる。

一方冒険教育とは、「自然の中で様々な困難やストレスを伴う活動を与え、それらを克服することによって感動や成功感を体験すると共に、自己に対する意識を向上させ、人間形成を図ることを目的とする活動」(飯田、1997)といえる。冒険教育はドイツ生まれのユダヤ人教育者Kurt Hahnの教育実践が始まりといわれている教育方法であり、その活動例は教育を目的とした海洋活動や山岳活動、サバイバル経験、チャレンジ体験などを挙げることができる。Hahnの教育実践は1941年ウェールズのアバドヴェイに設立されたOutward Bound School(略称OBS)の活動プログラムによって世界中に広められた。日本では冒険教育という言葉がなかなか社会に知られていない現状があるものの、OBSやProject Adventureなどの実践によって現在も精力的に冒険教育に関する活動が展開されている。また、近年冒険教育に関する実践報告や心理学的な側面からの研究も増えてきている。

幼児教育の場に視点を向けてみると、子どもの自然体験の必要性が求められているものの、その指導や支援にあたる幼稚園教諭や保育士に豊かな自然体験を指導・支援する能力や資質が十分にあるとは必ずしも言えない現状があると思う。その実、多くの保育者養成校には充実した自然体験のプログラムが教科科目の中に存在しない。また、子どもの自然体験の減少が叫ばれる昨今、大人の幼少時代の自然体験の乏しさも危惧されるところである。保育者の中には自身に自然体験が少ないまま育った者も多くいると考えられる。そのような現状を踏まえ、幼児教育に携わるものには、自身の豊かな自然体験並びにその指導・支援をする能力を養う必要があると考えられるのである。

さて、鎌倉女子大学短期大学部専攻科初等教育専攻は、幼稚園教諭や保育士を目指す学生に対してより高度な教育実践力の養成を目的とした一年生の課程である。この専攻科では近年の子どもの野外教育に対するニーズの高さから2006年度より

『キャンプ』という授業科目が実施され始めた。そのキャンプでは主に幼稚園教諭や保育の現場で働くことを目指す専攻科生を対象にして、環境教育的及び冒険教育的な自然体験プログラムを含んだ教育的組織キャンプ活動を展開している。このキャンプでは、第一次的な学習として学生自らの自然体験を目的とし、そしてそこから第二次的な学習として、子どもに対して自然体験の必要性を伝えられる指導者としての能力・資質を高められるようなプログラム展開を行っている。

研究の予備調査

本研究では2006年度に実施された専攻科授業科目『キャンプ』に参加した12名の学生を対象にして予備調査を行った。予備調査では幼稚園教諭もしくは保育の現場で働くことを目指す学生が、組織キャンプにおいて教育的プログラムを経験し、どのような気づきがあったのかを、自由記述の振り返りシートから分析し、「自分自身に対する気づき」、「人間関係に対する気づき」、「自然・生活環境に対する気づき」という3つの観点に分類を行った。その結果、「幼稚園教諭もしくは保育の現場で働くことを目指す学生の自然体験における様々な気づきは、自分自身を含む、自分を取り巻く現象世界の各要素を変容させる可能性のあること」や、「学生の自然体験は、幼児の自然体験の必要性を理解する上で必要である可能性が高い」(西島、2007)ことが考えられるといった結論を得ることができた。

今回の研究では予備調査から得られた結論をもとにして、幼稚園教諭もしくは保育の現場で働くことを目指す学生の組織キャンプ活動についての研究をさらに深めることとした。

研究の目的

本研究では鎌倉女子大学短期大学部専攻科の授業科目『キャンプ』を受講し、かつ幼稚園教諭もしくは保育の現場で働くことを目指す学生が、教育的組織キャンプに参加することによってどのような気づきや変化があるかについて調査・分析することを目的とした。

研究の対象

本研究では2007年度に開講された鎌倉女子大学短期大学部専攻科の授業科目『キャンプ』に参加した、専攻科生12名及び児童学部児童学科3年

場所：	国立妙高青少年自然の家
日時：	平成19年8月6日（月）～9日（木）
人数：	女子学生18名、指導者3名
目的：	教育的組織キャンプを経験することで、その知識と実践力を高める。また、野外を上手に活用することによって自然の偉大さや必要性を体感し、子どもたちの遠足や集団宿泊行事に対応できる指導力を身につけていく。
日程：	
1日目	朝 大学出発 午後 自然の家到着 アイス・ブレイキング 生活の場づくり 野外炊事 夜 野外ゲーム
2日目	妙高山登山（図2）
3日目	朝 野外炊事 午前 アドベンチャー 午後 ・プログラム 夜 キャンプ・ファイヤー
4日目	午前 環境教育プログラム 振り返り、テスト 午後 自然の家出発 夜 大学到着

図1 キャンプの内容

生6名の合計18名の学生を研究対象とした。専攻科生以外の学科の学生については、その学生が前述した本研究の目的に沿った将来の目的を持った学生であることから研究対象とした。

本研究で対象としたキャンプの内容は図1の通りである。宿泊はすべてテント泊とし、食事については野外炊事と登山中以外は食堂で取った。アイス・ブレイキングにおいては学生のコミュニケーションを促進するような集団でのゲーム活動を

野外で行った。アドベンチャー・プログラムにおいては国立妙高青少年自然の家のアドベンチャー・プログラム施設を利用して、イニシアティブ・ゲームを中心に展開した。環境教育プログラムはネイチャー・ゲームなど、自然環境をテーマとしたゲーム活動を行った。

指導者3名の内、1名をキャンプ・ディレクターとし、1名が主にプログラムを担当、もう1名は主にマネージメントを担当した。活動は食事を除きすべて18名が一つのグループで行い、全員がすべての活動プログラムを同時に経験した。研究対象の学生は全員、大学での事前の理論学習を経てキャンプに参加した。

研究の方法

本研究の調査は、1) キャンプの事前・事後でのアンケートと、2) キャンプ最終日に行った自由記述の「振り返りシート」の回答をもとに、二つの方法から分析を行った。

1) 事前・事後のアンケート調査

事前アンケートはキャンプ初日に大学を出発するバスの中で、事後アンケートはキャンプ最終日に大学に帰るバスの中で配布をし、回答を得た。これらのアンケートは無記名とし、評価の信頼性を高めることに努めた。事前・事後のアンケート作成においては、田中ら（2006）の「自然学校事前アンケート」及び「自然学校事後アンケート」の評価内容を参考にした。特に本研究においては、アンケートを4段階尺度評価における事前・事後の比較のために用いた。事前・事後アンケートでは「楽しそう」、「新鮮さ」、「自然体験」、「幼児教育への必要性」の4項目について、キャンプに参加する前後でのイメージ比較を評価したものを抽出し、比較を行った。さらに項目ごとに評価の平均値を求め、標準偏差を算出した。

2) 自由記述の「振り返りシート」の分析

キャンプ全体の振り返りをすべて自由記述で回答してもらい、それを分析した。参加者はキャンプ最終日の「振り返り」の時間に「振り返りシ-

ト」への回答を行った。記述の時間は約1時間程度とした。

対象者には「振り返り」、「感想」といった目的で記述してもらい、対象者に対する誘導的な質問や呼びかけは行わないようにした。分析にはKJ法を用い、その手順に従って自由記述のキーワード(700回答)を分類し、カテゴリー化した。

分類や分析の方法については佐藤ら(2005)の「KJ法を用いた自由記述の分析」を参考にし、本研究では「キーワードのカテゴリー化」までを行った。またそれぞれのキーワードについては、その場面を指す活動ごとにも分類を行い、活動プログラム別の回答出現数も求めた。

結果と考察

1) 事前・事後のアンケートの結果

4段階尺度評価における「楽しそう」、「新鮮さ」、「自然体験」、「幼児教育への必要性」の4項目について、キャンプに参加する前後でのイメージ比

較を集計した。評価は4が高く(良い印象)、1が低い(悪い印象)とした。有効回答は事前アンケートが18名、事後アンケートが17名であった。

「楽しそう」(表1)の項目については、キャンプ前では「3」の評価をつけた学生が一番多く、キャンプ後では「4」の評価をつけた学生が一番多かった。「新鮮さ」(表2)では、キャンプ前で「2」の評価をつけた学生がいたが、キャンプ後では見られず、すべて「3」以上の評価となった。

表3 自然体験

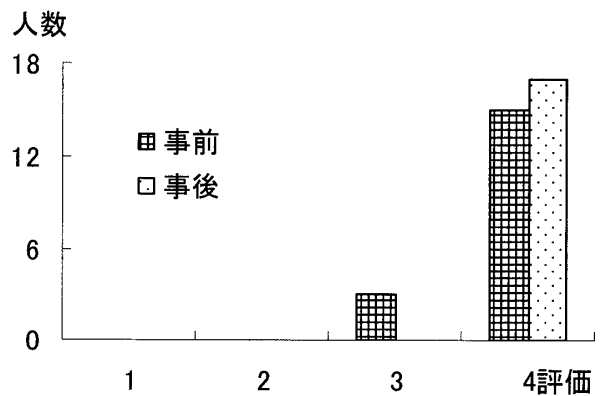


表1 たのしそう

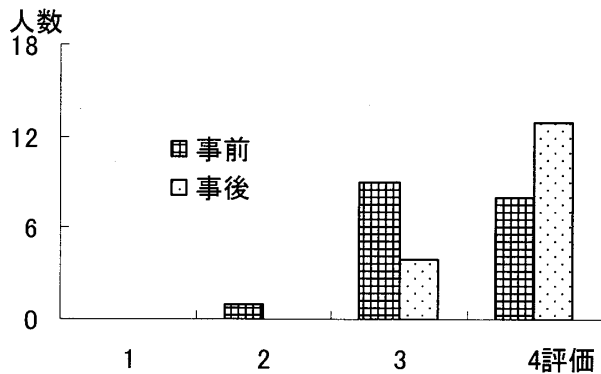


表4 幼児教育への必要性

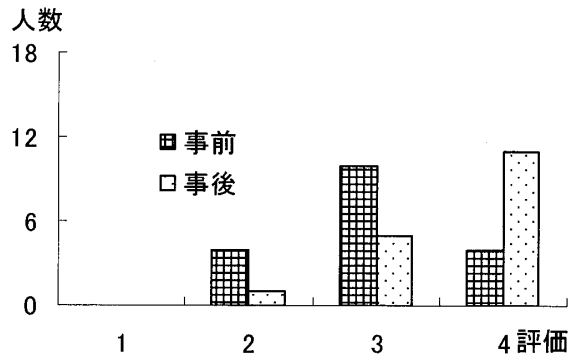


表2 新鮮さ

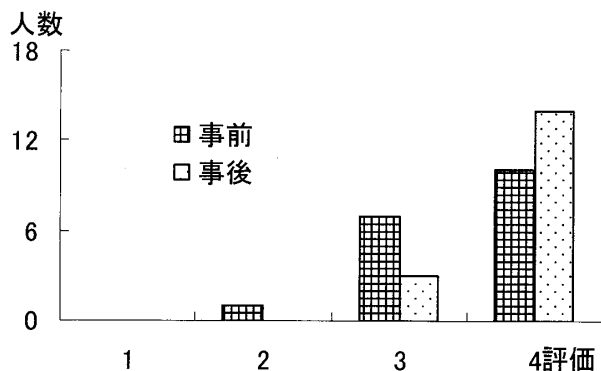
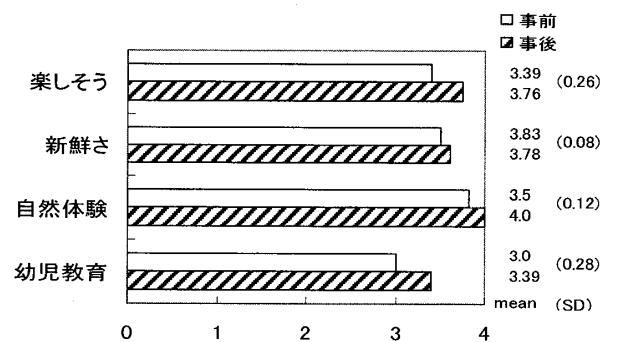


表5 平均(mean)と標準偏差(SD)



「自然体験」(表3)の項目では、キャンプ前で「3」の評価をしている学生がいたが、キャンプ後では全員が「4」の評価となった。「幼児教育への必要性」(表4)の項目については、「楽しそう」の項目とほぼ同様、キャンプ前では「3」の評価が多数いたが、キャンプ後では「4」の評価が多数であった。

また、項目ごとに事前事後の評価平均を求め、

その標準偏差を算出した結果、表5のように平均値が「楽しそう」、「新鮮さ」、「自然体験」、「幼児教育への必要性」の4項目すべてにおいて事前より事後のほうが高いということがわかった。これらの結果から、このキャンプを経験した学生の多くは、キャンプが始まる前と終わった後で、キャンプに対する考え方や心境に変化があったと考えられた。「楽しそう」、「新鮮さ」、「自然体験」の

カテゴリー	No.	分類	数	カテゴリー	No.	分類	数	カテゴリー	No.	分類	数	
A 自分	1	課題	7	B 仲間	33	存在認識	24	D 活動 体験	66	初めて	6	
	2	挫折	6		34	協力	20		67	肯定	26	
	3	頑張り	16		35	励まし	15		68	楽しみ	5	
	4	自己啓発	5		36	交流	9		69	不便	2	
	5	達成	21		37	絆	5		70	恐怖	2	
	6	喜び	16		38	共有	4		71	辛さ	31	
	7	自信	4		39	友情	13		72	満足	11	
	8	楽しさ	17		40	出会い	3		73	不安	19	
	9	笑顔	9		41	迷惑	2		74	否定	20	
	10	体調不良	10		42	信頼	13		75	短期間	8	
	11	逃げ	8		43	ひとつ	6		76	物的必要性	3	
	12	諦め	18		44	過程での分裂	10		77	学び	12	
	13	自己否定	17		45	不思議	1		78	貴重	4	
	14	自己理解	6		46	温かさ	8		79	思い出	11	
	15	肯定	6		47	会話	4		80	久しぶり	3	
	16	チャレンジ	21		48	心地よさ	1		81	驚き	2	
	17	努力	3		49	思いやり	7		82	温泉	2	
	18	自己発見	17		50	大切	7		83	危険	1	
	19	自己開示	3		51	必要	2		84	軽い気持ち	1	
	20	悔しさ	2		52	優しさ	4		85	充実	5	
	21	成長	5		53	受け入れ	2		E 指導者	86	感謝	9
	22	意識変化	11		54	涙	5		分2回15	87	支援	6
23	主体性	1	55	感性	13	F 将来	88	見直し	3			
24	運動不足	1	56	賛美	22	分類3	89	人生設計	7			
25	集中	1	57	山頂	10	回答13	90	教育者	3			
26	寂しさ	2	58	自然否定	1		合計	700				
27	感動	4	59	満喫	2							
28	我慢	1	60	雷雨	4							
29	疲れ	3	61	共存	3							
30	元気	2	62	自然理解	7							
31	勇気	3	63	自然感動	11							
32	ゆとり	5	64	畏敬	7							
			65	自然発見	2							

図2 キーワードの分類とカテゴリー

項目においては、学生自身の野外活動や自然体験そのものに対する意識の向上が見られたと考えられた。また「幼児教育への必要性」の項目からは、学生がキャンプでの活動プログラムを体験することにより、自然体験や野外活動に対する視野を広げるきっかけを作ることができると考えられた。

2) 「振り返りシート」の分析結果

対象者18名の自由記述から抽出したキーワード700回答について90の分類を行い、「自分」、「仲間」、「自然」、「活動体験」、「指導者」、「将来」の6項目にカテゴリ分けを行った。90分類700回答の内容は、「自分」についてが32分類251回答、「仲間」についてが22分類165回答、「自然」についてが11分類82回答、「活動体験」についてが20分類174回答「指導者」についてが2分類15回答、「将来」についてが3分類13回答であった。

「自分」のカテゴリにおいては「達成」や「チャレンジ」といった回答が多くあった。このことはこのキャンプが登山など自分の内面を引き出すような内容の活動が多くあったためと考えることができる。「自己発見」や「頑張り」、「楽しさ」、「喜び」、「意識変化」といった回答が多かったのもそのような環境を経て出てきたものであると考えられる。しかしポジティブな回答の反面、

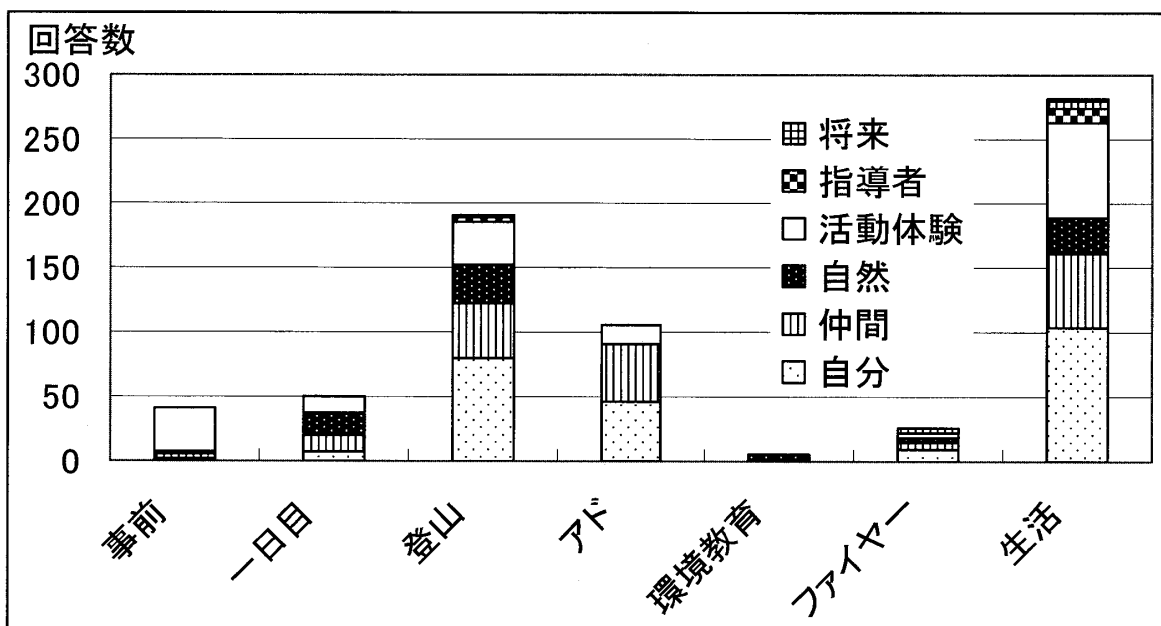
「諦め」や「自己否定」に関わるようなネガティブな回答も多くあった。このキャンプを振り返ることで、自分の普段の生活を振り返る機会を得ていたと考えることもできる。また、6つのカテゴリの中でも「自分」に関する回答数が251と最も多く、全体のほぼ三分の一を占めていた。このキャンプの内容が日常生活では経験できないような、自分に対する何らかの気づきを与えるきっかけを多く含んだキャンプであったということが考えられる。

「仲間」のカテゴリにおいては、「存在意識」や、「協力」、「励まし」、「友情」、「信頼」といった回答が多くあった。登山やアドベンチャー・プログラムなど、仲間を意識する活動や、集団生活を過ごすことによって得られた回答であることが考えられる。また、アドベンチャー・プログラムなどの活動を通して「過程での分裂」があったという記述も多く見られた。

「自然」のカテゴリにおいては、自然を「賛美」する回答や、自然に対する「感性」や「感動」についての回答が多く見られた。妙高山の「山頂」を表す回答が多く見られたことも興味深い。

「活動体験」のカテゴリにおいて、経験・体験した活動プログラムに対してのポジティブな回答としては「肯定」的な感想、「学び」、「思い出」、

表6 活動プログラム別回答数



「満足」などが見られ、ネガティブな回答としては「辛さ」、「否定」、「不安」などが見られた。否定的な回答の多くは、活動の過程での辛い経験や否定的な態度などがほとんどであった。

その他、指導者に対する「感謝」や「支援」についての回答や、自分の将来に対する「人生設計」や「見直し」といった回答もあった。

表6の活動プログラム別回答数は、学生の回答がどの活動時のものを指すのかをまとめたものである。項目を整理する上で、活動プログラムを「事前（キャンプ前に感じたことなど）」、「一日目（アイス・ブレイキング、生活の場づくり、野外炊事などを含む）」、「登山」、「アドベンチャー・プログラム」、「環境教育プログラム」、「キャンプ・ファイヤー」、「キャンプ生活全般」の7項目に分けることとした。

活動プログラム別に回答数を見ると、キャンプ生活全般に対する回答数が281と最も多く、次いで登山の回答数が191であった。その他、アドベンチャー・プログラムに対する回答数が106、一日目が50、事前が41、キャンプ・ファイヤーが26、環境教育プログラムが5という結果であった。

登山においては「自分」に対する回答が登山プログラム全体の約42%あるなど、他の「仲間」や「自然」などの要素に比べ、自己に対する記述が多く見られた。

アドベンチャー・プログラムでは「自分」に対して以外にも、「仲間」に対する回答率が高い（約41%）という結果が出た。アドベンチャー・プログラムが「協力」や「信頼」をテーマにした活動であったことが、「自分」と並んで高い回答率を得た理由と考えられる。

環境教育プログラムにおいては、活動に対する回答のほとんどが、その活動の対象となる「自然」に対するものであった。

ところでこのキャンプは冒険教育的活動や環境教育的活動を包含した野外活動を中心に展開したが、どちらかというとなら冒険教育的活動に重きが置かれた活動内容であった。登山やアドベンチャー・プログラムの回答数に対し、環境教育プログラムやキャンプ・ファイヤーに回答数が極端に少

ないのは、キャンプの運営に当たって、登山やアドベンチャー・プログラムに活動時間の多くを割いたことが理由と考えられる。また、施設や環境の設定という点から見ても、今回のキャンプで学生の印象に残りやすかった活動が、環境教育プログラムやキャンプ・ファイヤーといった活動よりも、登山やアドベンチャー・プログラムといった活動にあったのかもしれない。

上記のような自由記述を整理すると、対象者である学生は三泊四日のキャンプを通して、普段の生活ではなかなか経験できない多くの気づきが個々人であったと考えられるのではないだろうか。記述の内容は人によって様々であるが、特に「チャレンジ」、「達成」、「自己発見」、「存在認識」、「協力」、「自然賛美」などに見られる記述内容は、その後の日常生活に生きてきたり、今後の人生により良い影響を与えたりできるような価値観の変容の表れであったと考えられる。幼稚園や保育の現場で働くことを目指す学生にとって、この教育的組織キャンプには幼児教育の現場で役立つような様々な教育的要素があったとも考えられた。

また、活動プログラムや、指導者の持つねらい、環境の設定などによってもキャンプに参加する学生の学習内容が変わると考えられた。幼稚園教諭や保育の現場で働くことを目指す学生は、キャンプでの様々な自然体験活動プログラムを経験することによって、自然体験の重要性を理解し、またその活動を支援する能力を養っていくことができると考えられるのではないだろうか。

まとめ

本研究では鎌倉女子大学短期大学部専攻科授業科目『キャンプ』を受講した学生18名を対象にして、対象者にどのような気づきや変化があったのかを事前・事後アンケート及び自由記述の「振り返りシート」での調査・分析を行った。その結果をまとめると次のようになる。

- 1) 教育的な目的を持った野外活動プログラムがキャンプ活動を通して行われることによって、その参加者に多くの気づきや価値観の変容があることが示唆された。またそ

の活動プログラムや活動過程によって、参加者の学習内容に大きな違いがあると考えられた。

- 2) 幼稚園教諭や保育の現場で働くことを目指す学生にとって、教育的組織キャンプ活動を経験することは、子どもの自然体験を理解し支援する上で、非常に重要な経験であることが考えられた。

幼児教育や保育の場において子どもの自然体験が重要であることは前述した通りであるが、実際の教育現場に立つ教師や保育士のほとんどに豊かな自然体験や、その高い指導・支援の能力が備わっているとは言い難い現状にあると思う。幼児教育に携わる人が皆、自然体験に対する経験と理解を十分に兼ね備えていれば、子どもの自然体験をより充実したものにする事ができるのではないかと考えるのである。

しかし幼児に野外活動を指導・支援する場合、自身の野外活動の経験だけで指導技術や能力をまかなうことができるとは言えない。幼児教育に携わる者が、幼児の野外活動に対する指導者・支援者としての知識や技術を持つことによって、はじめてその指導・支援に価値が出ると考えられるのである。

子どもの自然体験の必要性が問われる今、自然体験ないし教育的組織キャンプ活動の位置づけを、幼稚園教諭もしくは保育士養成の必須プログラムとして考えていく必要があるのではないだろうか。

今後の課題

本研究では未だ対象データの母数が少ない状況がある。4段階尺度を用いた調査では、今後データ数を増やしていきたいと考えている。

またキーワードの読み解きに対しては、複数の指導者が観察・評定するなどの方法を用いることや、学生の個別体験をもっと重視することにより、さらなる深まりが出てくるのではないかと考えられる。今後様々な角度から総合的な見方をし、研究を進めていきたい。

本研究では今後も継続して累積的な調査を重ねたいと考えている。そして幼児教育者の自然体験

ないしキャンプ活動に対してその必要性を検討していきたいと考えている。

引用・参考文献

- 1) 文部省『幼稚園教育要領解説』1999、フレーベル館
- 2) 石井哲夫、待井和江編『改定保育所保育指針全文の読み方』全国社会福祉協議会、2000
- 3) 文部科学省『小学校学習指導要領解説—総則編』東京書籍、2004
- 4) 森上司朗、高杉自子、柴崎正行編『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、1999、p.123
- 5) 岡島成行、関智子『自然体験活動の指導者制度導入が農山村の活性化に及ぼす影響—CONE初級指導者（リーダー）を事例として—』野外教育研究、2006、p.72
- 6) 文部省『青少年の野外教育の充実について』青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力会議、1996
- 7) 日本キャンプ協会編『キャンプ専門科目テキスト』日本キャンプ協会、2004
- 8) 岡村泰斗『野外教育から見た環境教育・冒険教育』青少年問題8巻、2000、p.12-19
- 9) 降旗信一『ネイチャーゲームでひろがる環境教育』中央法規出版、2001
- 10) 飯田稔『生きる力を育む冒険教育』女子体育8巻、1997、p.9
- 11) 石川道夫『クルト・ハーンとアウトワード・バウンド』教育新世界第50号、2001、p.60
- 12) Hahn, Kurt. (1957) . ORIGINS OF THE OUTWARD BOUND TRUST, Evans, The Year Book of Education, p.1.
- 13) Röhrs, H. (1966) . Kurt Hahn, London Routledge&Kegan Paul.
- 14) Flavin, Martin. (1996) . KURT HAHN'S SCHOOLS & LEGACY, THE MIDDLE ATLANTIC PRESS.
- 15) Skidelsky, Robert. (1975) . Schulen von gestern für morgen, Hamburg, Rowohit Taschenbuch Verlag GmbH.
- 16) 原田純子、益田悦子『身体活動における冒険

教育の可能性—ロッククライミング、沢登りを事例として—』大阪女学院短期大学紀要30号、2000、p.129~142

- 17) 西島大祐『幼児教育者養成プログラムとしての組織キャンプの可能性』鎌倉女子大学紀要、2007
- 18) 田中利明、矢部京之助『自然学校における指導補助員の教育的効果について』野外教育研究、2006
- 19) 佐藤豊、石沢順子『高等学校における野外教育プログラムの効果—「総合的な学習の時間」に向けて(1)—』野外教育研究、2005

要旨

専攻科の授業科目『キャンプ』を受講した、幼稚園教諭もしくは保育の現場で働くことを目指す学生が、教育的組織キャンプに参加することによってどのような気づきや変化があるかを調査・分析した。

その結果、教育的な目的を持った野外活動プログラムがキャンプ活動を通して行われることによって、その参加者に多くの気づきや価値観の変容があることが示唆された。またその活動プログラムや活動過程によって、参加者の学習内容に大きな違いがあると考えられた。

また、幼稚園教諭や保育の現場で働くことを目指す学生にとって教育的組織キャンプ活動は、子どもの自然体験を理解し支援する上で、非常に重要な経験であることが考えられた。

(2007.10.25受稿)